恋は突然やって来る

マランビジー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋は突然やって来る

【Ｎコード】

Ｎ８２８６Ｓ

【作者名】

マランビジー

【あらすじ】

主人公はアパレルメーカーに勤める営業マン。自由奔放な部下に振り回されながら人生の春を迎えます。部下の佐倉響子を中心に繰り広げられる物語です。

1　辞意

梅が咲き春の便りが届き始めて桜の季節が訪れると私は秋の準備を始めた。アパレル業界では半年も先の商品企画に追われる。華やかさに満たされたこの業界。社内は女性だらけで旧友たちに羨ましがられた。私自身も入社当時は大いに盛り上がっていた。営業としての売上予算が与えられるまではそうだった。身近に女性はひとりいればそれで良い。そんなことを学ぶにはとても良い業界だ。

入社して二度目の春を迎えた頃、私にも何人かの部下ができた。直営店のスタッフが全て私の配下になったのはこの春だった。営業をしながら直営店を管理することは決して楽ではなかったが直営店には実に楽しいスタッフがいた。社内で一番の人気者、佐倉響子の存在は誹謗中傷渦巻く女子社員の中では特別だった。特別美人でもない彼女だが同性たちからは愛されていた。仕事で特別な活躍をするわけではなかったが遊びに関しては達人だった。彼女は絵を描くことが上手く自宅の壁にポップな芸術を刻んでいた。仕事が終わると一人で街をうろつきながら洒落た店を日々発見していた。雑誌の掲載より遙かに早い彼女の情報は彼女の人気の大きな要因だった。人気者の周囲には自然と人が集まり彼女の週末の予定を独占できる人間はいなかった。そんな彼女が辞表を提出したのは夏のセール品の在庫がほぼ片付いた頃だった。彼女の辞意は社内を駆け巡り私専用の回線は内線が鳴り続けた。私には人事権がなかったので何も答えようがなかった。辞表の受理は人事部に聞けば良いことなのだ。しかし、あまりにも多くの問い合わせに屈した私は佐倉に辞意の理由を確認することにした。

佐倉の所属は自由が丘の直営店で閉店間際まで混雑していた。私は閉店時間を待ち佐倉に会社を辞める訳を聞いた。

「インドに行くんです」佐倉は躊躇なく答えた。

「インド？」私は意味がわからなかった。

「インドって素敵ですよね。一度行ってみたかったんです。インドに行くために貯金をしていたんですけど目標額が貯まったので辞めます」佐倉は何かおかしいですかと言わんばかりの調子だった。私には理解できなかったが佐倉にとって仕事とはインドに行くための手段でしかなかったのだ。自由奔放といえば聞こえは良いが数字と日々格闘する私にとって多くの顧客を抱える佐倉の退職は歓迎できるものではなかった。私は佐倉の復帰を望んだ。私が佐倉に聞いたその日最後の質問は職務上重要なものだった。

「インドからはいつ頃戻る予定？」

「わからないです。行ってから考えます。気にいったら帰ってきません」佐倉は当然のように言った。佐倉の退職を食い止めることができなかった私は社内で言われのない批判にさらされたが次の桜が咲く頃には誰もが佐倉を忘れていた。

2　波紋

日々飛び交う根も葉もない噂は翌日まで持ち越されることもなく短い寿命を全うする。女子社員が作りだす社内文化は少数派の男たちとは無縁に日々更新されているのだ。彼女たちから発信される情報の数々は発信者当人さえ忘れてしまうものが大半で水面に広がる波紋のように自然消滅する。波紋を広げる小石の数は女子社員の数に勝り水面に広がる波紋の数を知る者はいない。しかし希に水面に放たれた石が大きな波紋を生み出すことがある。その日に投じられた石は佐倉という名の石だった。水面の波紋を全て呑みこみ佐倉響子の帰国の報は社内を駆け巡った。発信元不明の噂は鈍い男子社員たちのアンテナにも届いた。私が耳にしたのは夕方で自由が丘に向かう直前のことだった。直営店の売上で頭がいっぱいだった私にとって、かつてインドに渡った女のことなど前日に飲んだ酒よりおぼろげなものだった。私は佐倉帰国の波紋に関わっている場合ではなかったのだ。私は直営店の売上実績一覧表を持参して自由が丘に向かった。

自由が丘店の来客数は衰えを見せることなく閉店時間まで盛況だった。しかし、店内で盛況ぶりを発揮していたのは佐倉帰国の噂だった。佐倉の波紋は社内を飛び出し顧客にまで広がっていた。私が店に足を踏み入れて最初に聞いた声は「佐倉さんが帰国したって本当ですか」だった。職務以上に重きを置かれた佐倉帰国の報は無視できない勢いを帯びていた。私は本来の目的からかけ離れた風聞に振り回されることになった。無味無臭の職務から得られない彩りを佐倉は不在のまま放っていた。

佐倉帰国の波紋はその放射円を拡大し続け翌週になっても衰えることがなかった。記憶の果てから到来した彼女は実像を結ぶことのないまま社内を席巻した。この頃になると誰もが佐倉帰国を信じていた。それどころか佐倉帰国の噂は佐倉復帰待望論に進化を遂げて

いた。当人の存在と意思に関わることなく膨らみ続ける期待は会社を動かすに至り私の週末は佐倉捜索にあてられた。佐倉の実家がある横浜を訪れたのは桜が散り際の日曜日だった。

3　佐倉の帰国

私がわざわざ横浜まで足を運んだのには理由があった。佐倉家に電話をしても誰も電話にはでなかったのだ。私が直接佐倉家を訪れて誰もいなければ佐倉の復帰待望論にもひとつの節目ができると私は思っていた。いつまでも風聞と向き合っているわけにはいかなかった。どれほど佐倉が社員たちに愛されていようと私にとっては過去の人間に過ぎなかったのだ。

佐倉家は丘の斜面に沿った道沿いに慎ましく建っていた。呼び鈴を何度か押したが反応はなかった。多くの社員たちが落胆することを想像すると申し訳なく思った。しかし、私にはどうすることもできなかった。佐倉家の長い不在が意味することを考えてみても仕方のないことだった。納得出来ない者が勝手に調べれば良い事なのだ。私は佐倉家を後にした。私は元町を経由して本牧に向かい新たにオープンしたショッピングモールを見ることにした。売上予算達成のためには新規取引先が必要になるからだった。

真新しいショッピングモールは広い敷地の中に幾つもの個性的な建造物を有していた。佐倉の噂に振り回されるより新しい顧客を探すことこそ有意義だった。私は数ある店舗の中から自社商品を納品できそうな店を探した。その中に派手な原色でペインティングされた店があった。かなりの盛況ぶりだったので覗いてみることにした。するとそこには波紋の中心人物がいた。私は風聞の中にいたはずの佐倉に遭遇してしまったのだ。佐倉はビビットカラーの服を身にまといその存在を強く主張しているかのようだった。手際良くラッピングした商品を客に笑顔で手渡す姿は自由が丘で勤務していた頃より遙かに魅力ある接客だった。社内を乱舞した佐倉帰国の波紋は現実のものとなった。しかし同時に佐倉復帰の待望論はその思いを断念させられる事になったのだ。

4　予感

佐倉が私に気づいたのは休憩で店外に出ようとした時だった。
「あっ！ご無沙汰です」佐倉は私に声をかけてきた。
「久しぶりだね。インドはどうだった？」私は挨拶代わりに聞いた。
「思ったほど楽しくなかったです。向こうで出逢った男に惚れちゃったんですけどフラれちゃいました」佐倉は舌を出して自分のおでこを左手で叩いた。
「それは残念だったね」私は無難な言葉を選んで言った。
「残念どころかラッキーでした」
「そうなのかい」
「最低でしたよ。私がすることをいちいち聞いてくるんですよ。鬱陶しいったらありゃしないですよ」
「気になるからだろう」
「気にするなって言いたいですね。デートにちょっと遅れたぐらいで不機嫌になるんですから疲れちゃいますよね」
「時間に遅れるのはまずいよね」
「あっ、そうですね。それはそうです。でも私って絵を描き始めると他のことはすっ飛んじゃうんですよ。だからたまにデートすっぽかしたりしちゃうんです」
「それは怒るよね」
「そうですよねぇ。でもいいんです。ちょっとだけ恋愛気分に浸りましたからね」
「ならいいけど」私にはどうでも良いことだった。
「そういえば、みんな元気ですか？」佐倉は昔の同僚たちについて聞いてきた。会話の繋ぎのようにも思えたが私にとってはありがたかった。
「みんな君のことを気にしているよ」最も肝心なことを私は佐倉に告げた。

「本当ですか？忘れられたかと思っていましたよ」佐倉は意外そうだった。
「みんな会いたがると思うけどな」私は社内ウケも考えて佐倉に再会を促した。
「はぁ…」佐倉はため息混じりで答えた。佐倉自身は再会に興味がなさそうだった。
「時間がある時に会社に遊びに来いよ」私は社交辞令のつもりで言った。
「いいですね。たまには渋谷も悪くないよなぁ」佐倉の言葉はほとんど独り言になっていた。目の前の私よりも頭の中で映しだされる渋谷の光景に関心があったようだった。私には佐倉の元恋人の心労が容易に窺えた。
「今度の水曜日に行きます。お昼頃でいいですか？」佐倉は勝手に予定を決めていた。私は楽しみにしていると答えた。しかし楽しみより波乱が待ち受けていそうな気がした。事実その水曜日以降、桜吹雪の如き恋愛ラッシュが始まった。その渦中で私自身も唐突な恋に落ちていった。

5　復活の佐倉

月曜の朝に私が放った小石は岩石が如き猛威で社内に広がった。根も葉もない噂はその日の最上級のニュースに昇華した。佐倉帰国の報と水曜の佐倉来社は私の予想通り波乱を呼んだのだ。これほど社員に愛されていることに当の佐倉は関心すら示さなかった。佐倉の関心は常に佐倉の内側にあったのだ。

水曜日の昼が近づくと社員一同誰もが落ち着きを失っていた。佐倉に会うことを強く望む社員たちの狂喜とそれに巻き込まれた社員たちの動揺が社内を覆った。

十二時五分、ショールームの受付から佐倉来社の内線が入るとビルの最上階から下るエレベーターは、人だかりとなり普段使わない非常階段まで社員たちで溢れた。私は群れを成す集団には加わらず自分の席で昼食をとっていた。しかし私の席の電話に内線が入ると昼食を中断せざるをえなくなった。

「チーフ、来客の佐倉さんがお呼びです」事務的なはずの呼び出しは周囲の歓声のせいで大声になっていた。私は全て一階に降りたエレベーターを呼びもどし階下へ向かった。

「皆の衆、お元気そうでなにより！」階下では佐倉が社員たちに演説のような挨拶をしていた。

「おっ！お出ましですね。チーフに呼ばれたんですからいてくれなきゃ困りますよ」佐倉は私に向かって叫んだ。佐倉を取り巻く社員たちに阻まれて私は佐倉の近くまで到達できなかった。

「おーい、みんなチーフが通れないよ」佐倉が言うと私と佐倉の間にいた社員たちの群れが割れて道が出来た。まるでモーゼのようだった。佐倉が社長だったら社員たちの統率は万全だったかもしれないと思った。経営手腕は期待できそうもなかったが。

「チーフ、チーフ、ものすごく盛り上がっています。どんな仕掛けをしたんですか？」佐倉はあまり事情を飲みこんでいなかったよう

だった。
「何もしていない」と私は言ったが佐倉自身が盛況の元であることを当人が知らずにいることに驚いた。
「これは参りましたよ。大歓迎じゃないですか。今日みんなで飲みに行こうって話していたんですけどチーフも行きますよね」佐倉はまたしても勝手に予定を決めていた。
「ちょっと待て」私は唐突な申し出に嫌悪の表情をした。
「もし今日飲みに来てくれたらうちの店舗との取引きの仲立ちしますよ」佐倉は私の思惑をよく理解していた。
「本当か？」
「本当です。ですから男を十名集めてきてください。このままだと女ばかりになっちゃうんで」佐倉は交換条件を言うと「今晩は盛り上がろうね」と皆に告げてショールームから出て行ってしまった。
私は部下を酒に誘うことがなかったがこの日だけは頭を下げて付き合ってもらうことにした。部下たちは佐倉との宴を喜び、皆快く応じてくれた。彼らは佐倉の周囲には多くのイイ女がいたことを知っていたのだ。部下の快諾に気を良くしていると上司からも参加の申し出があった。その日の私は仕事よりもその晩の宴をアナウンスする連絡係と化していた。その日の終業時刻が近づくといつもなら入らない内線があった。
「間もなく終業ですよ。定時で仕事を終わらせてね。終わったら、全員ショールームに集まってくださいね」企画部のチーフだった。女子社員だけの企画部では終業前から慌ただしかった。定時終了がその日の目標となっていた。佐倉の再登場は作業効率まで高めてしまったかのようだった。残業が当然の日々からは想像できなかった。私の部下も別人のように働いていた。佐倉を主役に据えた宴は恋愛に見放された私の部下にも恩恵をもたらすことになった。

6　宴

その日の夜は一年のイベントをまとめたような賑わいだった。企画チーフが案内してくれた店は佐倉が選んだエスニック調の飲み屋だった。到着すると佐倉が受付をしていた。来店者にビンゴのカードを配っていた。総勢百名を超える出席者は佐倉を知る者ばかりだった。驚くべき人気者だったことを思い知らされた。佐倉はこの日に備えて店の手配もパーティの段取りも済ませていた。まさに遊びの達人だった。彼女が水曜日を指定したのはこのパーティを予定していたからだったのだ。彼女は来客の全てに愛嬌を振りまいてにわかカップルを次々と誕生させていった。その佐倉が私の元に現れた時一人の女性を伴っていた。

「ご紹介します。こちらは私の上司です」佐倉は伴った小柄の美女を私に紹介した。

「こちらは私の元上司です」今度は佐倉が私を紹介した。

「約束通りご紹介しましたよ。後はちょちょいとやっつけちゃってください」佐倉は紹介が終わるとまた別のカップルを作りに行ってしまった。私は紹介された女性に名刺を渡した。彼女も名刺をくれた。肩書きはマネージャーだった。

「私が仕入れをしていますから今度お店に来られる時は私を訪ねて下さいね」彼女は男が魅惑的と思う笑みを知っていた。私は一目惚れをするようなことはなかったが彼女は大半の男を魅了する術を心得ていたようだった。私は彼女とパーティが終わるまで話しをしていたはずだったのに内容のない会話で終始した。私が彼女の店を訪れる予定を話したことだけが実を結ぶ唯一の内容だった。その時の私にとってそれは新規取引先とのアポイントメントにすぎないはずだった。恋愛の予感などあろうはずもなかった。しかし佐倉が仕組んだ出会いは私の思惑を超えていた。その晩の宴は佐倉の陽気な挨拶で幕を閉じた。春が初夏の装いを整え始めるように社内の恋愛熱

も季節に沿ってその温度を上げていった。望んで落ちる恋もあればその期待すらないまま渦中にいることもある。佐倉は帰国ついでに周囲に恋愛熱を注いでいった。それを幸運に変えられた者がどれほどいたかは私にはわからなかった。分かっていたのは私が幸運を掴んだということだった。

7　憧憬の美女

私は佐倉が紹介してくれた新規取引のきっかけに感謝した。それは佐倉が勤めていたお店は上場会社が運営していたからだった。営業としては取引金額の大きさが実績反映に欠かせない。私は早速マネージャー職の美女を訪ねた。小柄な割に商談での態度が大きなその美女は我が社の商品絵型を見て取引条件を確認すると次回の展示会来社を約束してくれた。彼女の美しさは見事だった。しかし態度の大きさはいただけなかった。仕事でなければ係わりたくないタイプだった。私は商談が終わると佐倉を訪ねた。佐倉は新しい職場でも大人気でたくさんの客に囲まれていた。佐倉は私が店に入ると私をすぐに見つけて「早速来たんですね。うちのマネージャー綺麗だから来るのが楽しいでしょ」と言って私を茶化した。私はそうでもないと率直な感想を佐倉に漏らした。

「そうですか？ここに来る営業さんはみんなマネージャーの虜ですよ。でも最近婚約したらしいですから皆さんそれを知ったらがっかりするでしょうねぇ」佐倉は私の表情を見ながらその反応を確認していた。

「それは目出度いな。次回の商談の時にお祝いを言うことにするよ」私は美人マネージャーの虜でなくて良かったと思った。

「チーフはうちのマネージャーに興味がないんですか？あんなに綺麗なのに」佐倉が言った。

「美人なら渋谷にゴロゴロいるよ」私は佐倉に思ったままを言った。

「へぇ、そうですか。意外ですねぇ。男の人はみんなマネージャーの魅力にやられちゃうのかと思ってました」

「何事にも例外があるのさ」

「なぁるほど」佐倉は簡単に納得したようだった。或いはどうでも良いことだったのかもしれない。

「また渋谷で飲もうぜ」と私が言うと佐倉は「今度は横浜にしまし

ょう。チーフ向けのお店を見つけておきました。驚きますよぉ。楽しみにしていてください。男性二名の調達をお願いしますね。明日の六時に石川町の改札前ということで。よろしくです」佐倉はまたしても予定を勝手に決めていた。

「おい、六時は無理だよ。それになんで二人も呼ばなきゃならないんだ？」

「明日モデルをやっている友達と会うんですよ。かなり綺麗ですよ。女三人と男一人じゃチーフが気の毒でしょ。でも六時が無理だったら六時半でどうですか。元町の紅茶専門店で待ってますよ」

「七時」私は時間の変更を求めた。

「じゃぁ、七時で。なるべく早く来てくださいね」佐倉は言うことを言うとレジに戻って行った。私は社外の友人を誘うことにした。モデルが来るとなれば喜んで参上する連中はいくらでもいるのだ。

8　展示会

翌日、佐倉が案内してくれた店は確かに私が好きになる店だった。その店の名物はドラゴンサラダ。ドラゴンとは他界したスーパースター、ブルース・リーのことで私は大ファンだった。このドラゴンサラダを注文すると映画『燃えよドラゴン』のテーマが店内に流れるのだ。サラダは特に変わったものではなかったが三人分は楽にあった。佐倉はこれを面白がって三度も注文した。男が三人いて良かったと思った。私が伴った友人はその日の飲み会を大変喜んだ。佐倉が言うところのモデルも意外と暇らしく月に何度か同じ顔触れで飲むことが増えた。そんな賑やかなことが常習化する一方で社内では営業部長の横領が発覚しその調査は私に依頼された。部長の不始末の後片付けで私は飲み会どころではなくなっていた。部長が担当していた全国に散らばる取引先への対応で私の出張は頻繁になり東京を留守にする日が増えた。

私が四国の取引先を廻って会社に戻った日も毎度の噂が頻発していた。しかし、その中に私の部長昇格なる噂があったことに驚かされた。この噂は社外にも飛び火して取引先から気の早いお祝いまでいただいた。辞令もない昇格の噂はいつの間にか佐倉の耳にも届いていたらしく当然美人マネージャーにも達していた。自ら噂を否定してもその噂に付いた尾ひれはすざましくトッピングされた根拠は猛スピードで波紋の輪を広げていった。

噂がどうであれ日常の業務が変わることはない。噂の渦中にあっても私は淡々と日々の業務に精励していた。部長不在のまま数週間が過ぎ夏真っ盛りを迎えた。社内では冬の展示会準備が始まり部長昇進の噂も下火となっていった。

展示会の前日を迎えると営業部員たちは来社予定の確認に追われていた。私も取引先の来社予定を書類にまとめ新規取引で来社する美人マネージャーにも連絡をいれた。美人マネージャーは佐倉を伴

って来社することになった。営業部の男たちは美人マネージャーの来社予定を喜び、他の部署の女子社員たちは佐倉の来社予定に歓喜した。しかし喜びだけだはなかったのだ。人気者の来社を知らされた社員たちが驚くことになったのは来社当日のことだった。

展示会の初日は慌ただしく時間が過ぎた。私は来訪者たちの対応に追われ佐倉や美人マネージャーのことなど忘れかけていた。しかし当人たちが登場すると社員たちの熱気が私にも届いた。過剰な歓迎ぶりが歓声を呼びショールームが歓喜に包まれた。佐倉は到着早々私の元にやってきて終業後に時間をとれないかと聞いてきた。

「何かあるのか？」私は佐倉に聞いた。

「実はマネージャーのことで相談したいことがあるんですよね。それと私も仕事辞めちゃうのでそのことも話したいんですよ」

「またインドに行くのか？」

「それはまた後で」佐倉は美人マネージャーの元に戻った。展示会の最中でも気がかりを持ち込む佐倉はやはりただ者ではなかった。

9　結婚宣言

展示会に現れた美人マネージャーは佐倉が言った通り我が社の男たちを魅了した。先客の対応に追われていた私は美人マネージャーの接客を同僚に任せてその日は挨拶だけに留めた。展示会の初日に美人マネージャーの虜になった我が社の男たちは報われない恋に落ちていった。佐倉が言ったようにやられちゃったのだ。

展示会初日終了後の営業部では美人マネージャーの話題で盛り上がり彼女に恋人がいるかどうかなどといった不毛な会話が飛び交っていた。恋人どころか婚約者がいることを知らないままが彼らの短い幸福と悟った私は会話には参加しなかった。私はその日の受注の集計を済ませて業務を終了させた。美人マネージャーの話題より佐倉の話しを早く聞きたかったのだ。

佐倉は品の良い居酒屋で私を待っていた。「おっ！早かったですねぇ」佐倉はジョッキを高く持ち上げて私を出迎えた。

「ひとりとは珍しいな」私は佐倉がひとりで酒を飲んでいる姿を初めて見た。

「そう言えばそうですねぇ。珍しいです」佐倉はひとりでいても空想で退屈などしないのだろうと私は思った。

「ひとりで飲んでいてもナンパもされない寂いしい女ですぅ！」佐倉は少々酔っていた。

「ナンパされたかったらもっと若向きの店に行けばいいじゃないか」

「ダメですよ。それじゃ誰に会うかわかりません。ここなら知り合いに会うことはないですからねぇ」佐倉はケラケラ笑いながら話した。

「それで話って何？」私が聞くと佐倉は笑いをやめて生真面目な表情になった。

「実は、実はですねぇ、私結婚しまぁす」佐倉は唐突なことを言った。

「おめでとう。それはよかったね」
「そうなんですよぉ。インドから追いかけて来ちゃったんですよねぇ。さよならしたはずの男が」
「インド人と結婚するのか？」
「いいえ、インド人じゃありません。イギリス人です」佐倉は意表をつく達人だ。インドでイギリス人と交際していたのだ。
「それじゃイギリスに行くのか？」
「違うんですよねぇ。パプアニューギニアです」佐倉の性格そのままだった。支離滅裂だった。
「なんでパプアニューギニアなの？」
「それは私の絵が南太平洋に合っているからです」
「行ったことあるのか？南太平洋」
「ありません」佐倉はあっさり答えた。
「なんで合っているなんてわかるんだ？」
「それはですねぇ南太平洋だからですよ」
「なんだそりゃ」
「きっと綺麗ですよ。南太平洋」佐倉はインドで出会ったイギリス人とパプアニューギニアに行くのだ。なんともややこしい。佐倉らしいと言えば佐倉らしい。
「良かったな。みんな寂しがるだろうけど」私は社員たちの失望を想像すると気の毒に感じた。

10　結婚祝い

佐倉にとって結婚は大した問題ではなかった。佐倉が私に話したかったことは全く別のことだった。
「チーフ、実はですねぇ」佐倉にしては珍しく口ごもった。
「何？」私は佐倉の話しが終わったと思っていたので帰り支度を始めていた。
「マネージャーのことなんですけど」
「マネージャーがどうかしたの？」
「婚約破棄しちゃったんですよ」
「そうなの？」私にはどうでも良いことだったが美人マネージャーに熱を上げていた男どもには朗報だったに違いなかった。
「そうなんです。タイミングが悪すぎですよねぇ」佐倉は申し訳なさそうだった。
「確かに。でもマネージャーに言わない訳にはいかないよね」
「ですよねぇ。なのでチーフからそれとなぁく言ってもらえないですかね」佐倉はボクに手を合わせてお願いのポーズをとった。
「あのなぁ」私が断りの言葉を言おうとすると佐倉が手で言葉を遮った。
「マネージャー可哀そうなんですよ。だって元婚約者の男ときたら毎日店にやって来て嫌がらせをするんです」佐倉はかなり怒っていた。
「嫌がらせ？」いつの間にか佐倉はマネージャーの話題に変えていた。
「店の前でマネージャーの悪口言ったり、殴ったり、昨日なんか髪引っ張って引きずり倒しちゃったんですよ！」佐倉は猛烈な剣幕で話した。
「そいつはひどいな」私は佐倉に同意してしまった。
「でしょ、でしょ！これって犯罪ですよ。だからチーフがマネージ

ャーを守ってあげなきゃだめなんです」佐倉はかなり飛躍したことを言った。
「お前のマネージャーが気の毒なのはよく分かるけど守ってやりたい男ならたくさんいるんだから私に頼むことはないだろう」私は当然のように言った。
「チーフがいいんですよ」佐倉はきっぱり言った。
「なんで？」私は佐倉に聞いた。
「私とマネージャーを両方知っている人はチーフですから」
「そんな理由で私になるのか？」
「そうですよ。それに…」佐倉は途中で言葉を切った。
「なんだよ？」私は佐倉が言いかけたことを聞いた。
「あぁ、なんでもないです」佐倉らしくない歯切れの悪さだった。
佐倉は困惑しながらも言葉を続けた。
「チーフお願いします。明日お店に来てください。私の結婚祝いだと思って。お願い！」私では佐倉の懇願には敵わない。
「わかったよ。遅い時間になるぞ」私は佐倉に約束した。佐倉は喜びついでにその日最後のビールを注文した。

11　乱舞

佐倉に懇願された翌日も展示会の慌ただしさに変わりはなかった。違っていたのはその日の予定が展示会だけでは終わらないことだった。私は展示会が終わると急いで横浜に向かった。しかし、店に着いてみると佐倉はお休みだった。私は唖然とした。同時に不愉快だった。私は不愉快なまま帰宅することにした。ところがその時「チーフぅ！」と佐倉の声がした。振り返ると佐倉が走って来た。

「大変です。大変です。大変です！」佐倉はかなり慌てていた。

「どうしたんだよ」私は佐倉の慌てように不吉な予感を感じた。

「こっち、こっち。早くぅ！」佐倉は私の手を引っ張って別の店に走った。そこには男に罵倒されている美人マネージャーがいた。その男が佐倉の話していた元婚約者であることは容易に想像できた。

「おい！ダメ男。いつまでもマネージャーにしつこくしていると痛い目にあうぞ！」佐倉は元婚約者に向かって叫んだ。そして私の後ろに隠れた。当然元婚約者の視線は私に向けられることになった。元婚約者は逆上して私に向かってきた。言葉を発する間もなかった。元婚約者は売場にあった木製のハンガーを手に取り私に襲いかかって来た。

「なんだてめぇは！」元婚約者の雄叫びは四方に響いた。振り上げられたハンガーは私の左肩を直撃した。私は後ろの佐倉をかばっていたので避けることもできずにいたが握られたハンガーを元婚約者から奪い取った。すると佐倉が私の後方から元婚約者の顔をめがけてキャンディやらチョコレートをポケットから取り出し乱投しはじめた。元婚約者は佐倉の攻撃に怯んだ。その隙に私は彼の左腕をねじり上げ彼の背中にまわした。

「いてぇだろ！」元婚約者は悲鳴をあげた。

「どうだ。参ったか！」佐倉が元婚約者の足を思いっきり踏みつけた。

「ぐわぁ」元婚約者がまた悲鳴をあげた。佐倉は足の小指を踏みつけたのだ。どんな強靭な男でも堪らない。私はマネージャーを見て警察に通報するように言おうとした。しかし彼女は泣いていた。とても何かを頼めるような状況ではなかった。
「こら、ダメ男！情けないことをするな。情けない男がフラれるのは当然なんだぞ」佐倉は容赦がなかった。私は黙って佐倉の罵声を聞いていた。というより言葉を挟む間がなかった。
「お前が情けないから新しい恋人が助けに来たんだぞ。もう諦めろ！」佐倉は訳のわからないことを元婚約者に言った。
「なにぃ！」元婚約者が私を睨んだ。
「警察に行きたくなかったらマネージャーに謝って出ていけぇ！」佐倉の猛攻は止まなかった。
「悪いのはその女だろ！」元婚約者は佐倉に言い返した。
「女に手を上げるような男が悪いに決まってるんだぞ。早く謝れ！」佐倉は男が抵抗できないことをいいことに元婚約者の顔を両手でつねった。
「なにするんだ。いてぇだろ」元婚約者は佐倉に向かって怒鳴った。すると佐倉はとんでもないことを始めた。
「ご来店の皆さん。女を追いかけまわして、暴力を振るって、怨み言を言ってるバカ男がいますよぉ。どうぞご覧くださーい」佐倉は来店客に向かって叫び始めた。当然来店者たちはこちらに注目した。しかも大人気の美人マネージャーが常駐するお店だったので人が殺到した。ショッピングモールのフロアに佐倉の声は響いた。佐倉は何度も同じことを繰り返し叫んだ。こんな女を怒らせては取り返しがつかない。美人マネージャーのファンたちまで集まり始めて店の前は人だかりになった。元婚約者の顔が青ざめた。佐倉は集まった群衆に向かって「この男でぇす！」と言って元婚約者の顔を指差した。「こちらの紳士が助けてくれました。みんな拍手ぅ！」佐倉は私を指さして言った。元婚約者は青ざめたが私は真っ赤になった。
「警察には言わないであげるから、もうここへは来るな！ここにい

るお客さんたちも証人だぞ」佐倉は元婚約者が歯向かえないと悟って追いつめることをやめた。私はねじり上げた彼の腕を放した。元婚約者は何も言わず走り去った。集まった群衆が彼に罵声を浴びせていたが彼はすぐに見えなくなった。

「チーフ、マネージャーをお願いします。閉店まで私がお店を見てますから」佐倉は私にそれだけ言うと棚のブラウスをたたみ直し始めた。私はマネージャーを連れてモール内のカフェに向かった。

１２　最終話　さようなら、そして

同じ季節が同じ彩りに見えたのはその年が最後となった。佐倉が日本で過ごした最後の季節は秋だった。佐倉が放った光彩は失われるまでその眩さで周囲を照らしていた。しかし、自然の彩りを一層鮮やかに見せたその光彩も遠い南国からは届かなかった。その佐倉が去って間もなく私は部長に昇進した。誰かが流した噂は事実となった。佐倉を通して知り合った人々がもたらした恩恵は私に過分の地位を与えたのだ。

「昇進おめでとう」

何度となく言われたその言葉が佐倉の置き土産のように感じられた。佐倉が結んだ縁が私の実績を押し上げたのだ。佐倉がインドから戻り横浜の店に勤めなければ手にすることのできなかった幸運だった。その幸運を私にもたらした当人は店を辞めると早々に日本を去った。佐倉のパプアニューギニア渡航の波紋は彼女が帰国した時同様に社内を揺るがした。彼女は誰にも見送られずに母国を後にした。さようならを言う機会すら私たちに与えないまま彼女は南太平洋に行ってしまった。

その佐倉から便りが届いたのは春物の商品サンプルが仕上がった日のことだった。佐倉からの便りは南太平洋を描いた手製の絵葉書だった。私のために佐倉が描いてくれた最初の絵だった。そしてその絵葉書には佐倉が私に宛てたメッセージが綴られていた。

『ご結婚おめでとうございます！』

おしまい

１２　最終話　さようなら、そして　（後書き）

佐倉響子は実在の人物をモデルにしました。
破天荒でありながら皆に愛されるキャラクターが作品を完成させてくれました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8286s/

恋は突然やって来る

2011年4月30日12時25分発行